

〔閑田次筆^三〕此種[○]菊 奈良の御代までは、いまだ渡らざりしが、万葉集中には見えず、されば字音のまゝにてよびならへり、新撰字鏡にからよもぎといひ、又世に翁艸などいふも異名なり、日本後紀に、桓武帝の御作歌此ごろのしぐれの雨に菊の花ちりぞしぬべきあたらし其香を、と遊ばせしが見ゆれば、此御代のころはじめて來りしにて、こなたにては初より色香をめぐることとおぼしき也、

〔大和本草^七〕菊 順和名ニカハラヨモギト訓ズ、但ソレハ野菊ナルベシ、古歌ニハキクトヨメリ、蘇我菊ト云ハ、八雲抄ニ黃菊ナリトイヘリ、上代ニハ未中夏ヨリワタラズ、故ニ萬葉集ノ歌ニハ菊ヲ詠ゼズ、其後ソタリシユヘ、古今集ニハスデニ詠ズ、[○]中今案ニヒトエナル黃花ニ、スグレテ甘キ菊アリ、是藥ニ用ル眞菊ナルベシ、又冬菊ハ寒菊ト云、單ニシテ味甘シ、又重葉ノ小菊、黃色ニシテ味甘ク、秋冬堪寒テ久シクアリ、モロコシニハ菊ノ花一本ニ多キヲコノメルニヤ、范成大菊譜序曰、至秋則一幹所出數十百朶トイヘリ、唐繪ニカケル菊モ花多シ、日本ノ好事ノ者ハ、一莖只一花ヲツク、故ニ花大ナリ、菊ニ細子アルモノアリ、種之生ズ、白菊ハ大ナレドモ味甘カラズ、凡菊ノ葉春夏及秋ノ初マデ、ワカキ葉ハ久シクユビキテ食フベシ、脾胃虛瀉ノ人ニハ宜カラズ、菊ノ葉ヲ乾シテ茶トシ服ス、色モ香モ好ト、中華ノ行厨集ト云書ニアリ、花モ甘キハ生ニテモ乾テモ食フベシ、苦キハ不可食、胃氣ヲ損ズ、野菊ハ山野ニ多シ、性アシ、不可食、

〔和漢三才圖會^{九十四本}〕菊^同 節華 女華 女節 日精 女莖 更生 金蕊 治齋 周盈

陰成 傳延年[○] 中

按仁德天皇七十三年、始渡異朝青黃赤白黑菊種也、^{異朝者百濟國也、其黑色者未嘗、今亦有細菊、此乃近年所出之一種也、}今有稱五菊者、鵝毛、玉牡丹、^{並御愛、黃醉楊妃、京大白、帶微赤、}是等唐種始於筑前博多、栽之、今處處移種而甚難育、不茂盛、凡菊子極細或不見、故古者分根插枝爾、近年覺仲春蒔花瓣而生、出數多珍花、今得名者徑尺